

令和5年12月の研究会～能楽雑感（169）

今年6月の研究会で取り上げた中世の女性たちの続編として、「様々な逞しい姿」を今回のテーマとしましたが、これを取り上げたきっかけは、白洲正子著の対談集「対座」を読んだからです。

この本のなかの、著者と馬場あき子氏とのやり取りの一部を以下に紹介してみます。

馬場：謡曲の中でも、「鳥追舟」とか、「砧」とか、いろいろあります。夫が訴訟に行つて七年、十年も帰ってこない。・・・三年くらいは当たり前っていうか、みんな土地の訴訟で鎌倉に行くんですね。

白洲：政子に始まる鎌倉女性はやはり強かったという印象ですか・・・。

馬場：(中略)・・・所領を守るために、実際に武器を取っていた女性がいたのも事実です。巴御前もそうですね。「梁塵秘抄」の中にも、「此の頃京に流行るもの・・・薙刀持たぬ尼ぞなき」とあり・・・

馬場：(中世「は、一般的に女が非常に行動的になれた時代ですね。(中略)自分の意志でもって行動する女がかなり出てきたわけで、一口に中世は暗いとしているのは間違いですね。例えば、能では中世の女に綿々と内面吐露をさせていますし・・・

白洲：「うわなり」という言葉は古くからあって、本妻に対して新しい妻のことを言いました。だけど、「うわなりうち」になるのは、多分もう少しあとのことで、その典型的なものは「源氏物語」の葵上に対する六条御息所の嫉妬心です・・・

馬場：中世になると、狂言の「わわしい女」なんかの嫉妬はすさまじいものがある。下剋上の(時代の)新しい家というものは、自分たち(夫と本妻)が作り上げてきたものだから、男が新しい女を作ったら、自分の財産が損なわれることに・・・

以上が、書物に書かれている文章の抜粋ですが、私見としては、中世という時代を丸めて言えば、争いごとの絶えない時代であり、同時に私権(財産権の意識)が確立されていく時代。

それ故に、多くのドラマが生まれたのだし、女性の存在感が増したことで、様々な姿の女性像を垣間見ることができます。

以下は、曲ごとの、ワンポイントの所感です。

巴～木曾義仲の愛妾でもあり、ガードマンでもある女性。「色白く、髪長く、容顔真に

美麗なる人物」の悲劇の物語とみたい。だから、そのれを念頭に置くか否かで、後シテの「落花空しきを知る・・・」の謡出しが異なるはず。地謡の量的比重が大きいのでこの曲の巧拙は地頭の実力にかかっている。

松浦佐用姫（後場）～前場よりも更にダイナミックになり、シテも地謡も高揚感を出していかなくてはならない。本の書体が異なるので読み違いに注意して欲しい。

鳥追舟～仏教色の微塵もない人情物語。ワキツレが悪役として大活躍するが、義太夫ではないのだから、そこそこに抑制して欲しい。

「あれあれ見よや・・・で始まる独吟又は仕舞の部分はこの曲全体を凝縮した部分だから、心して謡いたい。

砧（前）～詞章の素晴らしさにおいて、節付けの卓絶において、超絶技巧の織りこみにおいて、比類がない。現存する謡の中でのベストの曲だと思う。

シテの夕霧に対する嫉妬心をどのように表現するか、最初の段階での課題であろうか。

鉢木～言うまでもなく中世の女性は、夫を復権させた賢夫人のツレ。

シテの出だし「あゝ降ったる雪かな・・・を、どのように謡うかはその日の気分で決めるのも面白い。すさんだ気持ちで、少々焼けっぱちなら、吐き捨てるように。視野は近景。一方、逆境にありながら、多少風流心が残っているなら、しみじみと、たっぷり。視野は近景から遠景にパンする。

中入前の、別れのロンギも謡い処で、俊寛や蝉丸とは別の趣を聞かせたいところ。

船弁慶・前～静御前と義経との別れの悲劇であるはずだけれど、キリ能である故か、ジメジメしたところがない。詞章も筋立ても明解であり、なんだか歌舞伎を思わせる。こうした特徴を損ねないようにしたい。

葵上～いくら嫉妬に狂ったとはいえ、シテの身分は皇女であることを忘れてはなるまい。つまり、鉄輪のシテのようになってはならない訳で、シテ謡の難しさはそこにある。ツレも、のっけから込み入った節回しがあり、シテとの絡みもあるが、役割は霊媒なので、感情移入しないで、淡々と謡いたい。